

岩手県文化財調査報告書第三十七集

岩手県「歴史の道」調査報告

奥の細道

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第三十七集

岩手県「歴史の道」調査報告

奥  
の  
細  
道

## 序

昭和五十三年度の歴史の道調査の一環として、調査を実施することとした「奥の細道」は、俳人松尾芭蕉、門人河合曾良の行路として有名であります。しかし、岩手県内の路行程については詳細な記録がなく、そのため調査すべき「道」を決定するのに時間を要しましたが、幸い調査員各位が参考文献や古地図を検討するなど熱心な調査の結果、「道」を決定することができ、周回の環境を含めて総合的かつ体系的に調査を実施し、その成果を集成することができました。

本書が、今後の交通関係遺跡の保護および歴史の道研究の一助となれば幸いです。

なお、調査に御協力いただいた調査員各位ならびに関係市町村教育委員会、諸資料を提供してくださった方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和五十四年三月

岩手県教育委員会

教育長 畑山新信

## 例言

一、本書は歴史の道「奥の細道」に関する報告書である。

二、本調査は主として次あげるものを収集し、調査を実施した。

(一) 収集したもの

古文書、地誌類、紀行文、古絵図類や明治時代の実測図など。

(二) 調査した事項

ア 道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。

イ 江戸時代の国界・藩界及び郡名。

三、本調査の調査員・補助員は左記のとおりである。

主任専門調査員 草間 俊一 岩手大学教授

専門調査員 細井 計 岩手大学教授

専門調査員 古田 義昭 盛岡市教委文化財専門員

地区調査員(全道) 伊勢 善吉 一関市一関公民館長

地区調査員(全道) 千田 一司 一関市舞川公民館長

地区調査員(花泉町) 増子 恭太郎 花泉町文化財調査員

補助員 高橋 哲郎 岩手大学文部技官

補助員 齊藤 恵美子 岩手大学教育学部専攻科学生

補助員 大村 尚視 岩手大学教育学部学生

四、本書は伊勢善吉と千田一司の共同執筆によるものである。

五、調査の方法は、地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもとづき専門調査員が確認調査を行なった。

六、本書は、文化課が編集にあたった。

# 目次

岩手県教育委員会教育長 畑山 新信

序	
例言	
まえがき	7
本論	8
古松岡	14
写真	15
地図	29

まえがき

一 「おくのほそ道」について、年來検討してきたところ、従来の諸説は今  
我々が調査すべき「道」については詳細を欠き、また、専門的諸先生方  
においてさえ、決定的な路行程を明らかにしていないことに意見の一致を  
みた。

二 というのは、「おくのほそ道」の記事が平泉に関する部分を除いて、行  
路に関する記述が簡単であることによるのである。即ち、芭蕉の「おくの  
ほそ道」には、

平泉

十二日、平泉と心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞傳て、人跡橋に  
難免彌霧の仕かふ道そこともわかず、終に路ふみたがえて石の巻といふ溪に  
出。こがね花咲とよみて奉たる金花山海上に見わたり、數百の廻船入江につ  
どひ、人家地をあらそひて蕪の煙立つまけたり。思ひかけず斯る所にも來れ  
る哉と、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあか  
して、明れば又しらぬ道まよひ行、袖のわたり・尾ぶちの牧・まの、笠はら  
などよそめにみて、遙なる堤を行。心細き長沼にそふて、戸井津と云所に、  
宿して平泉に到る。其間甘餘里ほど、おぼゆ。

三代の築館一院の中にして、大門の跡は、里こなたに有。秀衡が跡は田野に  
成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南面より流る、大河  
也。衣川は和泉が城をめぐるて、高館の下にて大河に落入。康衡等が舊跡  
は、衣が関を隔て南門口をさし穿め、夷をふせぐとみえたり。舊も葺置すぐ  
つて此城にこもり、功名一時の業となる。國破れて山河あり、城春にして  
草青みたり」と等打數て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡  
卯の化に兼房みゆる白毛かな

曾良

兼て耳驚したる二草開帳す。杯堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納  
め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて珠の屏風にやぶれ、金の柱箱雲に朽  
て、既知庵空虛の業と成べきを、四面新に隔て、堂を覆て風雨を凌。暫時千  
歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

尿前の淵

南部道途にみやりて、岩手の里に泊る。(後略)

〔「岩波文庫本」による〕

「曾良隨行日記」には

十二日 曇。戸今を立。三ノ安久津新田町。三ノ安久津津川入。入舟多。行。一  
加澤。三ノ、岩山。山。ノ関。黄。伴。二。着。合羽。モ。ト。ノ。ル。也。宿。ス。

十三日、天気明。己ノ魁。ロリ。平泉へ趣。一ノ山ノ日。三ノ平泉へ以上。武里  
半。ト。五。尺。式。リ。近。シ。高館。衣川。衣ノ関。中。尊。寺。光。堂。泉。城。さ。く

ら川。さくら山。秀平やしき等を見ル。霧山見ゆルト云。見ヘズ。タツコ  
カ岩ヤへ不行。三十町有由。月山。白山ヲ見ル。路堂ハ別堂留主ニテ不

聞。金鶏山見ル。シミン堂。宗景助院跡見。申ノ上。就。婦。ル。上。水。風。呂。敷。ソ  
シテ待。宿。ス。

十四日 天氣青。一ノ関ヲ立。四ノ

〔「岩波文庫本」による〕

この記述にもとづいて、岩手県内の芭蕉の通遊道路と、その沿道の文化財などについて詳細に論述したものに、金沢規雄（敬称略）の「『おくのほそ道』をたずねて」がある。

我々は記事に則して、古絵図を参考に、実地を調査して、長い間かかって検討を加えた結果、金沢の説に納得し得ないという結論に達した。

この検討に当っては、地元花泉町教育委員会と宮城県岩ヶ崎町、教育委員会、及びそれぞれの郷土史家と協議すると共に、実地に踏査して検討を加えた。

次に金沢の記述を引用し、その批判を通して、所見を明らかにしたい。

## 本論

元禄2年5月12日（陽暦 六月二十八日）

〔推定行程 約十里〕

登米

①3里。

▽長たん坂 ②5丁。

（上沼新田町⇨長根町トモ）⇨登米郡上沼村

〔注⇨宿駅なし〕

③3里。④雨降出ル。

▽大手口坂 ⑤1丁20間。

浦（磐井郡流郷浦津村）

⑥安久津

⑦32丁32間（俱金沢迄）。⑧一里。

⑨松嶋より此迄兩人共ニ歩行。雨強降ル、馬ニ乗。

金

▽なら坂川歩渡 ④4間半・深1尺。

▽金沢川歩渡 ④幅10間・深7寸。

（中村⇨磐井郡流郷中村）

①記載なし。②浦津村⇨18丁。金沢町⇨12丁

沢（磐井郡流郷金沢村）

③加沢。

④清水町⇨10丁6間。⑤村7文・⑥5文・⑦4文。

⑧一関町⇨3里11丁10間。⑨本86文・⑩57文・⑪43文。

⑫三ツ（但・関迄）。皆山坂也。

▽金沢川歩渡 ④幅6間・深1尺。

水（磐井郡流郷清水村）

⑬3里6丁42間（注⇨金沢より一関迄の距離から、前掲金沢⇨浦

水迄の距離を減じたものと一致しないが、記録のままに写す）。

⑭（本79文・⑮52文・⑯39文）。

▽金沢川歩渡 ④幅1間・深1尺。

▽大門坂 ④2丁30間。

関（磐井郡西岩井一関村） 浦。

⑰一関黄昏ニ著。合羽モトヲル也。宿ス。

⑱曾良隨行日記

▽古絵図

⑳宮城県内青館藏絵図

㉑安水風土記

以上の所見に対して、その後次の如く訂正している。

〔附記〕 金沢から一関へのコースについて、その後登米町懐古館の元禄の古絵図（宮城県図書館伊達文庫に収めて小規模で精細でない）を見る機会を得て、つぎのことを発見した。

つまり当時街道が、金沢川北岸を、関へ向かうものと、金沢清水・関と金沢川を二度渡渉してゆくものがあつたことである。この二街道は、大門坂の付近で合流している。とすると一関（二里十一丁拾間）

〔警片郡或金沢村風土記御用書出〕が生きてくる。同時に芭蕉たちは清水村には立ち寄りなかつたとみてよい。

本文を訂正できないので、ここに付記して訂正したい。

金沢規雄は本文では、芭蕉・曾良の兩人は「金沢（加沢）から清水を通り、大門坂にかかり、北上して鬼死骸村の北で奥州街道に出、やがて、一関城下へ入った。」とみている。大門坂からは、日と鼻の先きに股賑をきわめていたはずの「有弊」は通過していない。ともいう。

だが〔附記〕では、前述コースを通過するとすれば、金沢川を二度渡渉することに、当日の天候からしても、清水村には立ち寄りなかつたとみてよい。一と一定訂正している。我々はこの訂正を是認したい。

とすると、金沢（加沢）一関、間ほどの「道」を通過したことになるだろうか、という疑問がおこる。そこで、

「金沢規雄は、当日（元禄二年五月十二日）の天候から推察してか「清水村には立ち寄りなかつたとみてよい」といつているのは、どの程度の天候と降雨量をさしているかは不明であるが、我々は、一つの資料として「日本の気象史料」(原書房刊)のうちから、元禄二年五月十日（一六八九年六月二十六日）の項を所見するに、

(イ) 能登、越中諸國、大雨、洪水、政調記、五月十日大雨、熊州、越中洪水、能州宇出津之内六十軒流失、町之幅三十四間計之用出来、男女溺死四十七人、牛馬九疋、於輪船、大坂御城米舟破損有之、越中之内六十軒流失惣〇流橋四十二ヶ所、御藏共水入濡米々湯半相成川除用水御普請所大半流失。

(ロ) 元禄二年五月二十四日（一六八九年七月一〇日）

越後國 洪水

氣象卜天災誌 洪水 水位一丈一尺

(四) 元禄二年六月二十三日（一六八九年七月十四日）

甲斐國、大雨、洪水、一山梨縣水害史「五月二十九日朝より水出で村へ水荒込む、東ノ野は半分付付不中候（後略）」

〔日本の気象史料 三二〕

等々の資料及び「曾良隨行日記」の五月十二日前後の天候を（あくまで推察）同日記から抜萃のうへ推察してみるに芭蕉・曾良の兩人は前述の金沢規雄の「加沢から清水を通り大門坂にかかり、鬼死骸村に出て奥州街道に出、やがて一関城下に入った」とすると、どうしても「金沢川を二度」しなければならぬことになる。

一 我々には、この説を全面的に否定する確たる資料を持ち合せていない。

が、一関地方の降雨入りは6月19日頃、明けは7月23日頃となっている。しかし、年によっては5月下旬に雨天が続くこともあり、このような場合には6月上旬にいったん回復してから本格的な秋雨に入るのが普通といわれている。

一 加沢一関間の道程を、山口（元禄二年五月十二日）の天候及び当地方に散見できる古地図、古文書、書留等を総合してみた。また「曾良隨行日記」に表われている「戸今・上沼新田町・安久津（浦津）・加沢（金沢）・一関」という地名記録は、他日、他地所の「隨行日記」の詳細と比較照合してみるに、甚だ簡略をきわめ、戸今・安久津間の途中記録を抜きにして、ようやく安久津で、強雨のため馬に乗り、「一関黄伴二若」とだけにして「合羽モトル」ほどの雨に逢いながら、一関村を通過して一関村に「宿」とは、歴史や地理に詳しいはずの曾良でありながら、歌枕にも出していない田舎道とはいえず、「皆山坂也。」とだけの記述から、みちのくの旅の寂寥感とともに、雨にうたれて疲勞困憊の兩人の姿をうかがい知ることができると同時に、金沢規雄説とは別の道程を考えてみざるを得ない。

即ち、日記の「安久津（現津和野）、皆山（現皆山）、関（現関）、宿（現宿）」を「日本気象史料」及び「曹良隨行日記」等々から推考すれば安久津から馬に乗った向人は、強雨の中を、地元馬子とともに「皆山坂也」。一の道を通ることになる。土地感のある馬子は、加沢から水屋の増している金沢川を二度、歩渡りすることをさせたのではなからうかとも考えられる。何故なれば馬子は、一関へ着けば、すぐ浦津へ引返すことであろう。そこで割合平川と思われる金沢川の北岸を西に向って進むと程なく大門坂にかかり、そこから北上すれば前記金沢規雄説が生きてくるが、もし大門坂口まですんだと仮定すれば、日と鼻の先きにある有壁町になぜ宿をとらなかつたのかという疑問がわいてくる。

我々はこの推測をきき、芭蕉、曹良の向人は、金沢町を過ぎるとすぐ東往還である一関街道（一関側では石巻街道または金沢街道と云う）へ、直接登りかけたものと考えられる。金沢村端郷の大槻から飯倉山の東麓をめぐり、日向・五合田（五合田）を経て尋心塚杉に向い、左回しながら前沢の西に出、東に燕沢、西に牧沢（ともに牧沢村）部落を見ながら北進をつづけ、中屋敷・細田をぬけて追分（現、県立南光病院前）にかかった（これまでは「皆山坂」とみる。ここで右折すれば滝沢村、金田村（千既）方面に向う気仙街道となる。この追分より西寄りに北に向い、細見長根に馬歩を進めれば、七沢部落に点在する農家を左眼下にして、間もなく通称カッパ座（年代不詳。現在は通称屋敷名となっている）へかかり、そこを西北への道を下りながら、風よけ松林から隙見できる三関村の田畑、二関村の町並へと続き、やがて奥州街道へはじめて出、一関城下の地主町（一関村）に入ったものと思われる。（宿場、宿次里数については後述）

「宿ス。」の宿は金森利平又は白土氏という（杉浦正一郎校註、岩波文庫刊）が、当地方の郷土史家の中には、その信憑性を欠く、といえどもそれを否定するものもまた資料としては乏しい。その他の説もあるが、奥づけの資料としては今後の調査に待ちたい。

一関に「二泊」（随行日記十二日）のところに、〇の宿泊記号がある。だが前日の戸今のように検断にも届かず、そのうえ何某の家に宿泊したとも記さず（二関にも検断あり）、ただ「主水風呂敷ラシテ待」と云って、「主」の名前も記されていない。これをどのように解釈すればよいのか、今後の研究をまつしかない。

ついで十三日は「天氣明。巴ノ魁ヨリ平泉へ趣」とあり、このところを前記金沢規雄の記述を見ると次の如くである。

元禄2年5月13日（陽曆六月二十九日）、

〔巴魁より中上社まで。推定行程約4里〕

(6) 一関

① 17丁。② 林22文・決11文。

③ 当所一関町宿場。御座候他村五之宿次里数等之儀。二関村より中上候。

④ 一

▽ 岩井川橋。長54間・横3間。⑤ 一関村・山日村片瀬片川。

(7) 山日

日（磐井郡西磐井山日村）

① 平泉迄1里半。  
② 山日町宿場は、中里村山日村入合之所。西町へ中里村分ニ御座候得共、御座候義へ往古より山日町と中候事。

③ 伊沢郡前沢町五里6丁。

④ 林134文・鞍89文。

▽ てのい堰橋。長6間・横2間

(6) 平泉(磐井郡西磐井平泉村)

① 高館・衣川・衣ノ関・中尊寺<sup>（中尊寺）</sup>内光堂<sup>（中尊寺）</sup>・泉城・さくら川・さくら山・秀平やしき等見ル。泉城ヨリ西藩山見ゆルト云々見へズ。タツコクガ岩ヤヘ不行。三十町有由。月山・白山ヲ見ル。経堂・八別当留守ニテ不開。金鶏山見ル。シミン堂、先劫院跡見。

これで見られるように十三日は「天氣明。已<sup>（中尊寺）</sup>」とあり、その道筋は一関(地主町)から磐井橋を渡り、山日村の鍛冶町を北上、延喜式内社の配志和神社を左にみて山日町(中里村)へかかり、現国道4号線そいさらに北にすすむ。中里村を過ぎる頃には右前方に遠く東籬山<sup>（さき山）</sup>を望みながら大佐・佐野・祇園部落等を通過していったと思われる。

この間はいわゆる奥州街道(当地の元禄古絵図では中海道)又は(大正二年測図では、陣羽街道といわれている)で、道路の状態も割合よかつたろう。曾良はここでもまた十二日記述と違つて、「山日、<sup>（中尊寺）</sup>平泉(以上式里半ト云々式里近シ。」と割合正確に記録している。さらに平泉に着いてからは、前述(例)平泉④の如く克明に記述している。

— その中で杉浦正一郎校註(岩波文庫の)「霧山見ゆルト云々見へズ。」の註に、霧山は平泉町にあり。と記述されているが、我々の調査では、霧山は胆沢郡衣川村上衣川地内と確認している。

— また芭蕉・曾良の兩人が泉城まで足をのぼしたかどうか、という点についても、本文の「衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落入」と統合せたくえで、さらに天地踏査した結果次ぎのことが考察された。

— 随行日記の中「月山・白山ヲ見る。」の記述から、兩人は「白山」へ入ったとみる。この白山から和泉城跡へは、距離にして約一キロメートル。時間にして徒歩約十五分の位置(平泉町字泉城3)に現存してある。

本文「衣川は和泉が城を巡りて……」と随行日記「霧山見ゆルト云々見へズ。」を重ねながらの現地調査の結果、本文・日記ともこの情景は、先きに述べた白山よりは望見することはほとんど不可能であつたと思う。従つて我々は、芭蕉・曾良の兩人は、この泉城まで足をのぼし、衣川の流水を日のあたりにしたものと解したい。

— さらに、衣川をはさんで西側には、嘉祥三年、慈覚大師が白山と同時に勧請したと伝えられる月山(胆沢郡衣川村下衣川)や、衣川橋跡等々、連の歴史上の遺跡が見られる。歌枕・名勝・旧跡を探る歩く兩人にとつて、折角みちのくまで訪ねながら、これらを見落すはずがないとも考えられる。

— 霧山……については、研究者のもう一歩のつっこみ不足もさりながら、地元郷土史家の間でも「和泉城ヨリ西」方の高い山は、岩手・秋田・宮城の三縣にまたがる栗駒山(須川岳)で、前日の強雨のあとの「天氣明。一で、山(栗駒山)は霧にかすんで見えなかつたのではなからうか」という見解をしている研究者もいる。

— 我々は日記の「霧山……」に続き「タツコクガ岩ヤヘ不行。」の条で、なぜ曾良は霧山と「タツコクガ岩ヤヘ不行。」を並記したかについても考察せざるを得ない。「月山・白山」からはとうい見えるはずのない「タツコクガ岩ヤ」にふれた点については、あるいは事前に承知していたのか、それとも地元元伝説に「タツコクガ岩ヤ」には蝦夷の悪路土が住み、霧山には赤頭という蝦夷が住んでおり、常に往來があつて旅人をなやましたという伝説を地元の人に聞いたものか。但し、霧山にも「タツコクガ岩ヤ」にも洞窟の跡は現存している。かつてはその両窟は貫通してあり、さらに気仙地方まで延びていったという伝承があつて、義経生存説の一資料になつていたことは現在でも云い伝承になつていいる。

— 平泉以北(へも)行脚の旅を続けたという郷土史家もいるが、「おくのはそ



参考文献

- 1 おくのはそ道 校註者杉浦正一郎(岩波文庫) 岩波書店 昭和三十三年
- 2 おくのはそ道 訳註者<sup>原野</sup> (角川文庫) 角川書店 昭和四十二年
- 3 芭蕉句集 校註者<sup>山形</sup> 日本古典文学大系45 岩波書店 昭和五十年
- 4 芭蕉文集 校註者杉浦正一郎 <sup>原野</sup> 日本古典文学大系46 岩波書店 昭和五十年
- 5 芭蕉庵桃音 著者中山義秀 中央公論社 昭和四十九年
- 6 一関市史第四巻 地域史 一関市史編纂委員会 昭和五十二年
- 7 一関市史第七巻 資料編四 一関市史編纂委員会 昭和五十二年
- 8 諏訪近代史 諏訪教育会 昭和四十年
- 9 太陽コレクション 地図 江戸・明治・現代 4 平凡社 昭和五十二年
- 10 松尾芭蕉 日本を創った人びと18 著者尾形 仿 平凡社 昭和五十二年
- 11 一関の芭蕉の宿 奥羽史談第十一号 著者小林文夫 昭和二十八年
- 12 磐井部金沢流風上記御用書出  
おくのはそ道をなすて 著者金沢規夫 宝文堂 昭和四十七年
- 14 奥州街道宿駅制の研究  
元禄十二年古絵図 一関藩 八巻一増減
- 15 元禄十二年古絵図 仙台藩御領絵図 宮城県登米・懐古館蔵
- 16 文化十五年東北旅行絵図 千葉 孝威
- 17 仙台の散策 監修佐々 久 宝文堂 昭和四十八年
- 18 宮城県の歴史散歩 <sup>宮城縣高等学政社史料</sup> 山川出版社 昭和四十七年
- 19 奥州仙台加通見記 古文書を読む会編 宮城縣図書館蔵内
- 20 芭蕉その茶と俳諧 著者広末 保 日本放送出版協会
- 21 奥の細道吟行上・下 著者加藤敏郎 平凡社 昭和四十九年
- 22 俳諧の乞食人 著者四方山孫 文潮社 昭和二十二年
- 23 芭蕉の論 著者山下 海 桜楓社 昭和五十一年
- 24 芭蕉・藕村 図説日本の古典14 著者代表白石節三 集英社 昭和五十二年
- 25 陸奥道中案内絵図 慶応年間 樺本工蘭 著 講談
- 26 考証元禄時代 著者福田史生 雄弁出版 昭和五十年
- 27 国文学「解釈と鑑賞」第43原七号 古典作家の肖像 山下 海 至文堂 昭和五十二年
- 28 よみがえる馬宝 編集人渡辺 武 岩手日報社 昭和三十九年

31 磐井地方の近世文化 著者八巻一雄 北上書房 昭和四十四年  
32 奥の細道をたどる 著者井本農一 角川書店 昭和三十一年



「善井郡之元禄繪圖」(元禄12年3月)一関市・八卷一雄氏藏



花鳥町湯澤園神社 鎮五輪出土庫



八幡神社(花鳥町本町)

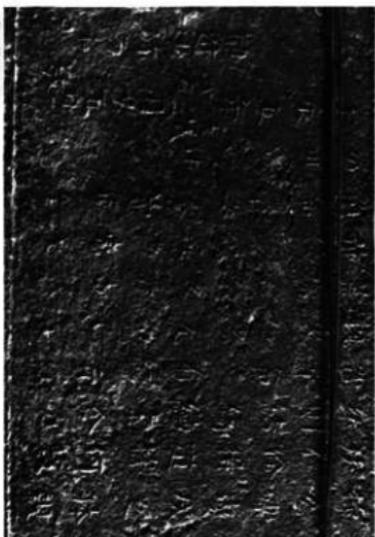


真中塚(虎子遺跡)花鳥町湯澤

第五輪埴埴輪 正面は梵文を鑿刻で彫出し、いる。昭和31年撮影定(高さ78.78cm、横、  
たて106.05cm 重さ750kg)



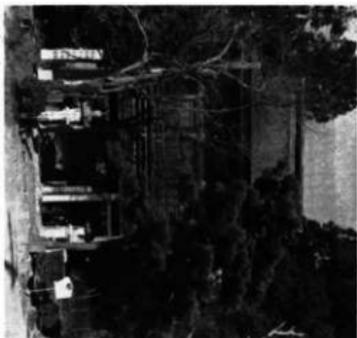
花巻町湯野八幡神社境内にある第五輪埴埴輪



第五輪埴埴輪



大塚常磐御所 石巻街道（花巻町本沢地区内）



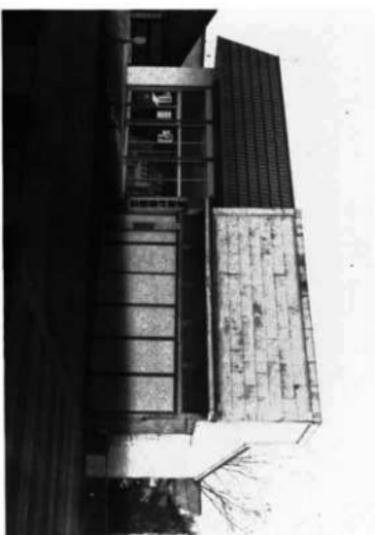
花巻町五峰観山門



一関市磐井橋東側附近 左 橋頭附近に一里塚があった  
右 手前の碑は明治天皇行在所跡



一関市 記念和神社遺蹟 国道4号登山口跡地内



一関市雄王町田舎集落 田舎一行階段之石塔



一関市 記念和神社参道入口



一園市 龍穴寺境内龍宮宝篋印塔



一園市 水鏡寺



一園市 肥後神社境内仁王菩薩印塔

千原町高野 宝印堂内にある書掛欄上掲文



一関市 水鏡寺蔵本籍「水鏡源朝臣公家」書掛欄代の作」筆指本

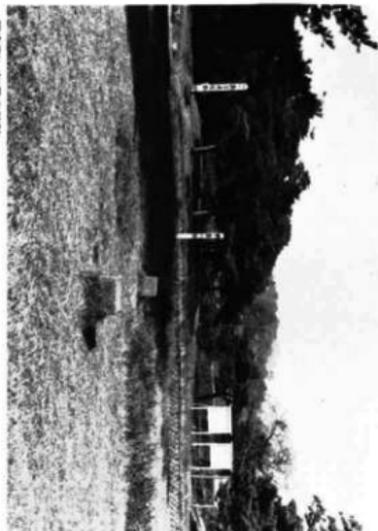


高野より北上川・交野附近を望む



平泉町高野 龍徳堂 天和3年11月7日伊達頼村公による  
て創建





平泉町 奥蔵光院跡



平泉町 柳の原所蔵別荘



平泉町 精養軒内の懸像 江戸時代の作?





西薬の勾欄(毛越寺境内)「軍事や兵の争の跡」



白山神社(平泉町岡山境内)寛持3年感業大徳の勧請と伝ふ



平泉町 毛越寺大泉池

一 延正 田原中本館



平泉町 和泉城跡 正徳の黒い山が月山



平泉町 和泉城跡 現在は田圃と化している

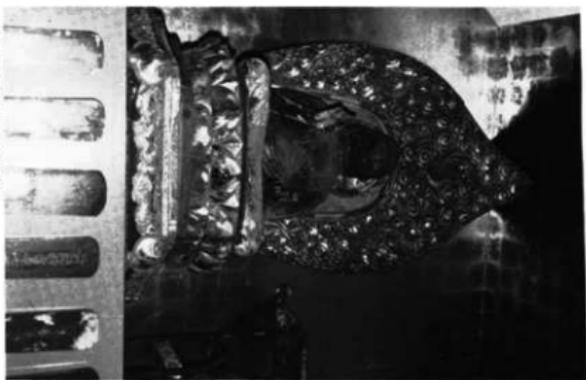




豊州街道と松山街道の分岐点附近



一瀬市 大安寺跡（留守政重公に殉死した家臣の墓）



豊後国杵築（一瀬市歴史館）



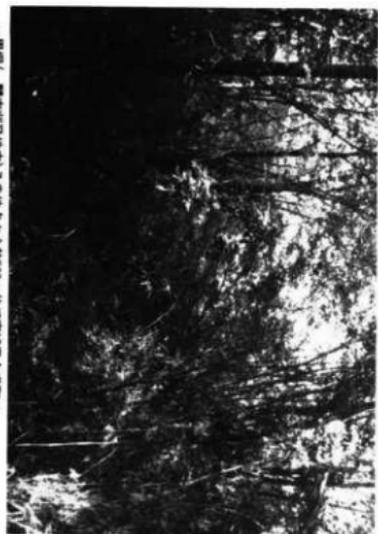
一関市 長風寺の月の大鼓



一関市 東北最初の県庁記念碑「豊吉の墓」



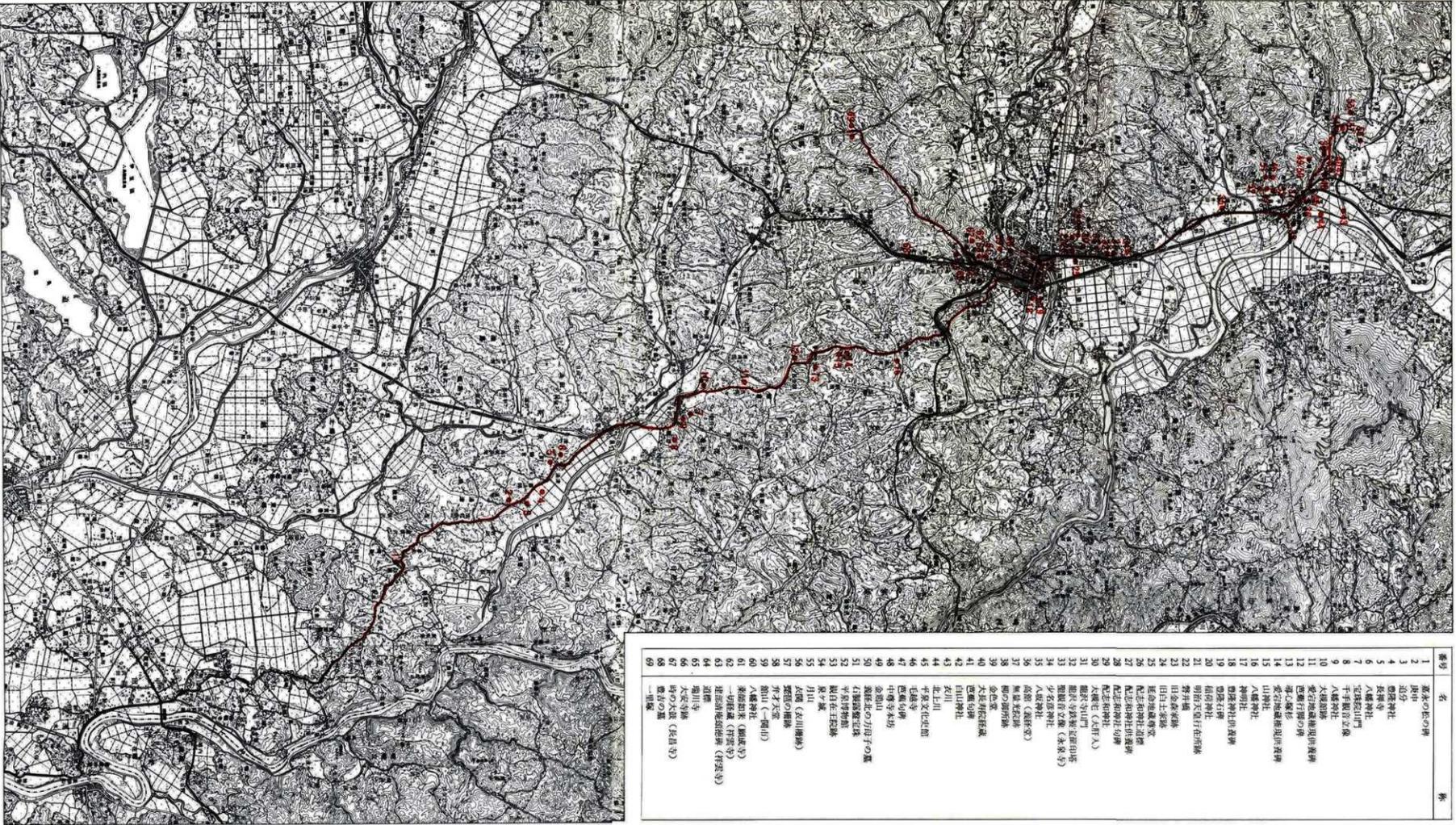
一関市 大安寺跡 源守政重の墓「寛政12年2月5日」



一里塚（一里市町文地区内）この地点から約500m位で徳島県庁へ



一里塚（一里市町文地区内）



番号	名	林
1	東本町の北の碑	
2	庚申	
3	道分	
4	豊隆神社	
5	八幡神社	
6	長寿寺	
7	生野山門	
8	生野山立派	
9	八幡神社	
10	大徳助	
11	愛宕山遊歩道見立碑	
12	愛宕山行脚の碑	
13	鳴心堂杉原川見立碑	
14	愛宕山遊歩道見立碑	
15	山神社	
16	山神社	
17	豊隆神社(庚申)	
18	豊隆石碑	
19	信行神社	
20	明石天皇行在所跡	
21	野井堀	
22	田舎茶屋跡	
23	田舎茶屋跡	
24	延命堂遺跡	
25	延命堂遺跡	
26	配志神社(山門)	
27	配志神社(山門)	
28	配志神社(山門)	
29	配志神社(山門)	
30	大徳寺(大徳寺)	
31	龍王山門	
32	龍王山門	
33	龍王山門	
34	龍王山門	
35	龍王山門	
36	龍王山門	
37	龍王山門	
38	龍王山門	
39	龍王山門	
40	龍王山門	
41	龍王山門	
42	龍王山門	
43	龍王山門	
44	龍王山門	
45	龍王山門	
46	龍王山門	
47	龍王山門	
48	龍王山門	
49	龍王山門	
50	龍王山門	
51	龍王山門	
52	龍王山門	
53	龍王山門	
54	龍王山門	
55	龍王山門	
56	龍王山門	
57	龍王山門	
58	龍王山門	
59	龍王山門	
60	龍王山門	
61	龍王山門	
62	龍王山門	
63	龍王山門	
64	龍王山門	
65	龍王山門	
66	龍王山門	
67	龍王山門	
68	龍王山門	
69	龍王山門	

岩手県文化財調査報告 第三十七集

奥の細道

昭和二十五年三月三十日発行

編者 岩手県教育委員会事務局文化課

発行 岩手県教育委員会

印刷 山口北州印刷株式会社